

# あんげろす

## オーバン神学校と明治学院神学部

岡部一興

昨年6月、オーバン神学校のことを調べにニューヨークに行った。なぜ、オーバン神学校なのかということであるが、かつて明治学院神学部を卒業した牧師が海外へ留学することになると、決まってこの神学校に留学していたのである。現在、明治学院大学には神学部はありません。

1872（明治5）年9月日本に在住するプロテスタントの宣教師たちが、横浜居留地39番のヘボン邸に集まって宣教師会議を開いた。その時、共同訳聖書の翻訳、教派に非ざる神学校の建設、そして教派によらない教会の建設の3つのことを決めた。ということがあって、1877（明治10）年アメリカ・オランダ改革派教会とアメリカ長老派教会が合同し、日本基督一致教会が生まれ、そして東京一致神学校が誕生した。やがてこの神学校が明治学院神学部になって行ったが、1930（昭和5）年植村正久なきあと東京神学社と明治学院神学部が合併し、日本神学校になり、現在の東京神学大学へと発展していくのである。

→次頁に続く



というわけで、明治学院神学部が消えてしまうが、太平洋戦争前までは、盛んにこのオーバン神学校に明治学院神学部の出身者が留学している関係から調査に出掛けたのである。オーバン神学校は、現在 1939 年にその使命を終えて、いわゆる神学校として、学生を育てる形を取ってはいない。講演会や研修会を行なう組織としては残っている。

かつて、オーバン神学校は N.Y. のオーバン市にあった。N.Y. のラガーディアン空港から飛行機で北に 1 時間ほどのところにシラキュース空港がある。そこから西へ 30 マイルほど行ったところにオワスコ湖があり、そこのオーバンという小さな都市にオーバン神学校があった。オーバン神学校は、1810 年 1 月オーバンの第一長老教会牧師 D.C. ラッシングの呼びかけにより、長老派と会衆派の結びつきによって設立された神学校である。1 万 5 千坪ほどのキャンパスには、学生寮モルガンホール、図書館、教室、校長宅、教授宅、学生たちの食堂クラブハウスなどがあった。

しかし、現在はウイラード・メモリアル・チャペルとそれに隣接するウェルチ記念館の建物だけが残っている。その校内には世界的な宝飾品で有名なティファニーによって設計された素晴らしい教会堂がそのまま残っていて、在りし日の姿を彷彿させるものがある。この教会堂を持ち主が必要なものを分けて売りさばこうとした時、住民から反対運動が起こって寄付を集めこの会堂が残った。現在は結婚式にも使われ、土産品などを扱い、見学者が結構来るようである。ここでも資料を探索、またユニオン神学校のパーク・ライブラリーにも資料があるので、そこにも行って来た。

オーバン神学校に初めて留学したのは、田村直臣で、卒業が 1885 年でこれが一番早く、その神学校の最後の卒業者の一人が、横浜指路教会の主任牧師になって、若くして亡くなった菅生三雄牧師であったことが分かった。田村直臣がオーバン神学校に留学するについ

ては、『G・W ノックス書簡集』によると、1882 年のはじめ田村の牧会する教会員との間に良からぬ噂が立ち、長老会で問題となった。ということがあって、M.T. トゥルー夫人のとりなしにより、推薦状がもたらされてオーバン神学校に留学することになった。そしてフルベッキとの関係もあって、その後オーバン神学校との関係が深まって行ったのである。

実に田村牧師から菅生牧師まで 73 名がオーバン神学校を卒業していた。そのうち何と明治学院神学部の出身者が 40 名にも上っているのには驚いた。日本基督教団が成立する以前、日本基督教会に所属する牧師たちが海外で研鑽を積む時には、決まってオーバン神学校に留学することになっていたもので、日本基督教会系の明治学院神学部出身者が多かったのである。勿論、東北学院、同志社、青山学院などの神学部の出身者も卒業生の中にいたことも確かであるが、明治学院神学部の出身者が圧倒的に多かったのである。

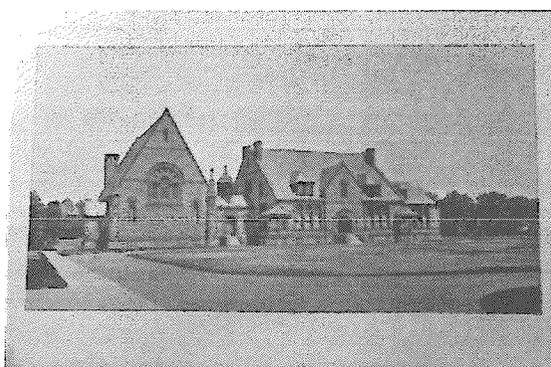
もう一つオーバン神学校とブラウンが牧したオランダ改革派の教会を見てみると、1856 年にフルベッキがオーバン神学校に入学、59 年に卒業している。フルベッキは、その学生時代に S.R. ブラウンが牧するオランダ改革派のサンド・ビーチ教会でブラウンの助手的なことをやっていて、ブラウンの推薦で、1859 年に同じ船で来航することになる。ブラウンは神奈川へ、フルベッキは長崎に上陸した。

ブラウンは来日前の 1851 年から 59 年の 8 年間サンド・ビーチ教会に任せ、そしてスプリングサイドという学校を立ち上げた。その先生をやっていたのが、フェリスのメアリ・キダーであった。(この学校は、現在スプリングサイド・インというホテルになって建物が残っている) サンド・ビーチ教会には、フルベッキ、キダー、そしてフルベッキの奥さんになるマニヨンがいた。またブラウン、フルベッキと一緒に日本に来日した最初の自給女性宣教師のアドリアンズもこ

の教会の会員であった。ということで、サンド・ビーチ教会は日本のキリスト教と大変関係深いことが今回の調査で分かった。サンド・ビーチ教会の建物は残っていて、礼拝としては使用していないが、結婚式や集会で使用している。

なお、オーバン神学校のことについては、明治学院大学キリスト教研究所『紀要』47号、「オーバン神学校に学んだ人々」に書いたので読んで頂きたい。今回この調査をするについて、筆者がいきなり出かけても成果が出ないと思ったので、オワスコ・アウトレットのリフォームド教会の牧師と連絡を取り、オーバンの街でキリスト教史の研究をしている人がいないか問い合わせをした。運よくその教会の会員で、30年来オーバンの街の事やキリスト教史を専門にしているローレルさんというヒストリアンを紹介して下さった。そのローレルさんが同行して下さいだったので、調査が非常にスムーズに行ったので大助かりであった。

わたしたちは、オーバンのホテルに4泊し、ローレルさんが所属するリフォームド教会にある S.R. ブラウン関係の資料を調べ、日曜日にはこの教会の礼拝に出席することができた。午後には、集会所でお茶を飲みながら教会員との交わりを持つ機会が与えられた。



ワイラード・メモリアル・チャペル

(現在も旧オーバン神学校の校庭に残る)

おかべ・かずおき(協力研究員)

歴史が歴史になるときを

大倉一郎

このところ、星野正興著『日本の農村社会とキリスト教』(2005)を読んでいる。自分の長年の不見識を思い知り、括目しながら読んでいる。同書は書名のテーマに真正面から取り組む希少な、その問題提起において重要な研究書であろう。刊行を知ってはいたが、当面する自分の関心を追いかけて見過ごしてきた。今ごろになって読むのは、今年四月に農村伝道神学校の教師に赴任したことによる。農村伝道神学校の教育と研究の営みに積極的に参与することになった。それが、自分にとってどのような課題となるのか、自覚的に捉えてみたいと考えた。その目的で担当の実践神学科目と数年来取り組んできた戦後日本のプロテスタント宣教思想の研究のあり方に関して考え始めた。神学校の書庫を調べ回って、本校の先達教師でもあった星野の同書にたどり着いた。

戦後日本の都市に生まれ育ち、その後の半世紀以上を都市社会で働き暮らしてきた、その自分の生活の座とそこで形成した関心や認識の性格をあらためて考えさせられている。その後も、農村社会や農民にキリスト教がどのように関わり、また関わってこなかったのか、ほぼ意識化することのないままできたと思う。とはいえ、私と農村や農民との接点が全くなかったわけではない。

先ず、四十数年前の体験である。「北海道」近代史に関心を持ち学部卒業論文に取り組んだとき、道南の農村教会、今金インマヌエル教会(聖公会)の前身となった「明治」中期の農業移民インマヌエル団体の形成史を書こうと試みた。その現地調査で、入植三代目のキリスト者農民を今金町に訪ね、道南三愛塾という戦後農民運動を指導したキリスト者農民を瀬棚町に訪ねた。それらの人々の職業と生活、あるいは労働と

人生が相即して共にある信仰の生き方は、都市のキリスト教徒だったわたしに深い印象を残した。その印象も、その後は自分の記憶の奥深くに沈殿させたままとなったのだが。

次に、近年、「北海道」余市で農業を営むキリスト者の友人との交流から生まれた事がある。農民オーケストラを指揮する音楽家でもある彼の長年の夢は農民芸術学校の創設である。彼は、イエス運動に靈感を得て、宮沢賢治の農民学校の試みに魅せられ、農と信と芸術とによる農民の誕生を夢に上記の学校を提唱した。わたしは、大学教員の定年退職が間近だった四年程前、学校設立準備の世話人を自ら買って出た。さらに、都会子であった息子が、ブラジルの農民解放運動の現場を共に訪れた体験を契機に、三年程前に農民になると決めて農業研修に入った。その研修農場を訪ねて、遅くなった息子が畑や鶏舎を案内してもらいながら、いずれは彼の農場造りにも関わりたいと願っていた。そして、昨年には私自身が農村伝道神学校の招聘をいただいた。自分の年齢を考えると遅きに過ぎる観も否めないが、日本の農村とキリスト教のテーマは、今やわたしに、けっして無関係ではなくなってきたと実感している。昨今の職と生活というだけでなく、今後の研究においてもそうだ。

戦後日本におけるプロテスタントの社会運動的宣教の史的全体像は、なお今後の探究課題である。しかし、すでにそこには星野が指摘した教会の宣教の姿が通底して現れるように思う。星野は近現代の日本の農村社会や農民に関わった教会の神学が伝道・教化の立場を出ることがなかった点を鋭く批判する。同時に農民との連帯を試みた個々のキリスト者の健闘を見逃すことなく、「それにもかかわらず、農村伝道は続けられた」と述べる。社会運動的宣教の歩みにおいても、教会の伝道・教化の姿勢は共通するところであった。それにもかかわらず、労働者や被差別民衆との連帯を

志した社会運動的宣教は続けられ、健闘したキリスト者が存在したと言いたい。

教会の伝道・教化の志向は大勢であったであろうが、なお農村と都市、双方におけるキリスト者の健闘を明らかにする必要がある。都市社会での社会運動的宣教は教会の伝道・教化の方向への自己批判的問いを含む。その歴史の解明においても、星野の指摘は示唆に富む。星野は彼の研究の今後に触れて言う。「やがて、そのような個別の小さな動きも見いだされ、それに評価が加えられることを期待する。表れている動きも、隠されている小さな動きもともに覚えられ、それが付き合わされていく時に歴史は歴史になるであろう」(264-265)。この星野の期待に共感を覚えながら自分の研究に取り組みたいと思う。

(農村伝道神学校教師・教団川和教会牧師)

おおくら・いちろう (協力研究員)



洪伊杓

昨春から、明治学院大学キリスト教研究所は韓国人研究者である足りない私を協力研究員として受け入れた。心から感謝している。しかし最近、東アジア三国の情勢が不安定で、特に日韓関係は冷たい風が吹いている。そんな時に、両国そして東アジアの明るい未来を拓くべき研究者として、どのように歩むべきかと自問してみる。幸い、研究所の素晴らしい先生方が暗黒の中で小さな希望の光としてその方向を模索しておられる。

明学は横浜と東京にそれぞれ二つのキャンパスがあるというが、私は最近「横浜と東京」在住のある二人の人物との出会いが与えられ、この紙面を通して紹介してみたい。

### 1. 横浜発メッセージ

今年8月、東京神田YMCAで開かれた「李樹廷マルコ福音書出版130周年記念国際学術大会」が終了し、韓国から来られた35名の参加者が京都に移動してから4日間、私は関西地域のフィールドワークの案内役をつとめた。その時、ある参加者が京都駅前で財布を拾ったと私に伝えた。財布の中には12万円もの大金が入っていた。私はすぐに京都駅前にある交番に行つて、日本在住の私の名前と住所を届け出た。

翌日、神戸でのフィールドワークを終える頃、ある日本人男性から電話がかかって来た。財布の持ち主は、初めて中国から日本に旅行しに来た若い女子学生4人の中の一人だった。日本での宿泊費や交通費、家族へのお土産代をすべて財布に入れていたのだろう。その学生の親代わりをしているという日本人男性から

の電話で、その人は関東に住んでいるが、その学生さんが心配でわざわざ関西にやって来たらしい。「届けてくださったお礼をさせてほしい」との言葉に、私と財布を拾った韓国人青年はこう答えた。

「これも何かのご縁。中国の方が落とした財布を韓国人が拾い、日本人がお礼の電話をしています。最近のように日中韓の東アジア三国の關係に冷たい風が吹く中で、本当に意味のある出会いです。だからお礼など必要ありません。」

「しかし、お礼をさせて頂きたいと(学生が)言っていますが…」

「大丈夫です。こんな出会いを通して、どうかお互いに偏見を持たず、東アジアの平和を願いましょう。財布を紛失された中国の方にもその旨を伝えてくださり、韓国と日本について良い印象を持ってくだされば幸いです。それで充分です。」

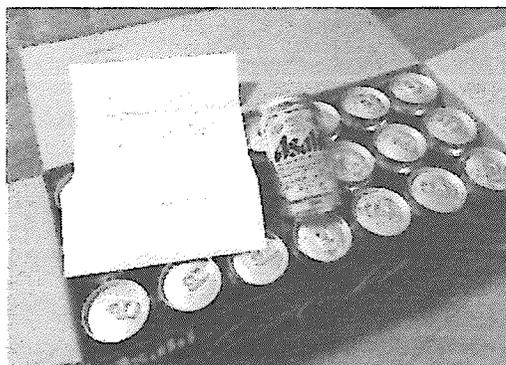
「本当にそのようにしても宜しいのでしょうか。心から感謝いたします。必ずそのことを伝えておきます。」

こうして電話は切れ、私は韓国からの来客を送り、慌ただしい日常にもどった。それから十日ほど過ぎたある日の夕方、家にダンボールいっぱいビールが届いた。どうした事かとびっくりして中を開けてみると、ビール数十缶と一緒に丁寧な手紙が入っていた。

「先日は、京都警察署に財布を届けて頂いてありがとうございました。洪さんと韓国から旅行に来られた方へ、ご親切には大変感謝しております。(略) 東アジアの平和のため良い隣人を覚える大事な機会

を与えられたと思います。中国の女4人も感動しています。是非横浜に来られるとご連絡お願いいたします。」(袴田秀人)

「偏見を持たず、東アジアの平和を」この横浜在住の袴田秀人さんも願っているのだろう。その夜、私は気分よく頂いたビールを飲んでた。明治学院の横浜キャンパスへ行く機会があれば、このことを再度思い出すのではないかと思う。



(写真1・横浜の袴田秀人さんから送っていただいたビールと手紙)

## 2. 東京発メッセージ

2年前、私は1940年から42年までの2年間「延禧専門学校」(現、延世大学)の副校長として赴任した日本人神学者である松本卓夫先生に関する論文「松本卓夫と朝鮮半島」を書いた。1919年から1940年までの20年間、青山学院神学部で新約学を教えた松本先生は、安定した職場を捨て、わざわざ韓国人を支えるために渡韓した。韓国では戦時下においてほとんどのキリスト教主義学校が閉校していた時、最後までアンダーウッド宣教師(H.H.Underwood)を助け延禧専門学校のために尽力した。詩人・尹東柱と文士・宋夢奎がその時代に珠玉のような詩と随筆を残した当時の延禧に、松本先生が赴任していたことは決して偶然とは言えない。

ある日、驚くことに、延禧専門時代に韓国で暮らしていた長女の加藤裕子さんから電話が来た。論文を読んでとても感激したと。(裕子さんは賀川豊彦先生を支え東京医療生協・中野総合病院を設立する時に貢献された加藤厚次郎博士の奥様だ。夫が建てた加藤医院は、今も下北沢にあるが、孫が代を引き継いで運営している。)

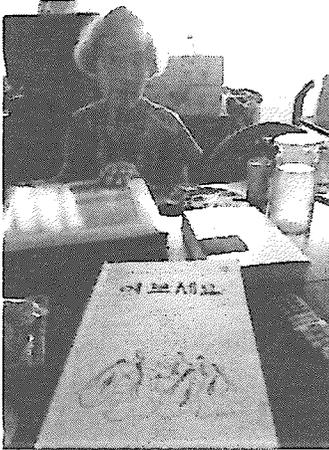


(写真2・1940年頃、延禧専門の青年たちと共に。中央の松本卓夫先生の後ろが裕子さん、その横のチマチヨゴリを着た女性が1945年広島原爆で召されたお母さん)

裕子さんは、1940年代に経験した韓国との出会いを大切に、夫と共に韓国語の勉強を続けた。そして「狛江韓国語同好会」を結成し、会誌である『여보세요』(ヨボセヨ)を編集、70年代から日韓交流活動を広げたとする。医者である夫は、韓国の代表的な詩人・李海仁修女の詩集も日本語で翻訳出版したほど韓国と韓国語を愛した。

電話と手紙のみで1年半ほど連絡を交わしたが、去る9月、東京での学会に参加した際に下北沢の加藤医院を直接訪ねた。92歳にしては信じられないほどきれ

いで、お話も正確に伝えられた。



(写真3 韓国との意味深い出会いを説明してくれる祐子さん)

裕子さんは、父である松本卓夫先生が延禧専門で活動した1940年から2年間、梨花女專のピアノ科に通っていた。しかし、戦争の激しさの中で宣教師が追放され、太平洋戦争勃発直後に帰国を余儀なくされた。父が広島女学院院長として着任したものの、3年後に原爆投下を直接経験し、母を失った。1949年に裕子さんは、その悲しみを *My Mother Died in Hiroshima* (San Antonio, Texas, The Naylor Company, 1949) という本にして発表した。父である松本先生は、以後、反戦、反核運動を展開し、預言者的な召命観を持ち活動した。その中でも、口語訳聖書翻訳委員長として日本語聖書翻訳史にも大きな功績を残したことはよく知られている。

裕子さんの部屋には60年近く使ったグランド・ピアノが置かれている。その上に半世紀以上置かれている小さな褪せた額縁の文句が目に入った。

「戦争において最初の被害者は『真実』である。」

(アイスキュロス、ギリシア劇作家)

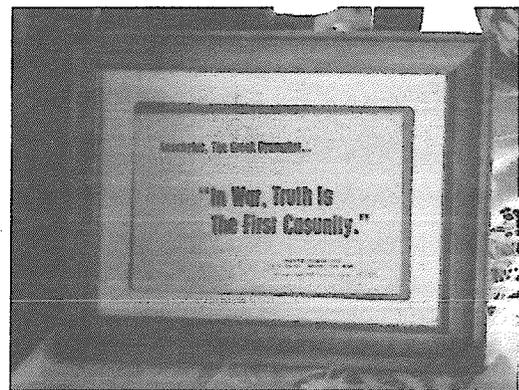
“In War, Truth Is The First Casualty.”

(Aeschylus, The Greek Dramatist)

「戦争に最大の敵になるのは『真実』である!」という翻訳も可能であろう。「平和」を壊して「戦争」を起こす人々は皆が「偽り」を伴う。彼らが最も恐れるのは「真実」であるから。

軍国の歴史的な事実を無視し、  
再び戦争国家になろうとする日本政府。  
独裁の歴史的な事実を美化し、  
再び恐怖国家になろうとする韓国政府。

最近、「真実」の前で目を覆い隠している両国政府は「真実の敵」(The Enemy of Truth)ではないか。今、私たちは「戦争の時」に突入している。戦争を直接経験して延禧専門学校の男子学生が戦地へと引っ張られていった姿、原爆で母が犠牲になった姿を目撃した92歳の裕子さんは、今もこの言葉を心に刻み、毎朝「平和」を祈っているという。また明治学院の白金台キャンパスに行くことがあれば、近くに住む加藤医院を訪ね、裕子さんにお会いしたいと思う。(京都東幕)



(写真4 裕子さんのピアノの上に置かれている平和への教訓)

ほん・いびよ (協力研究員)

牧 律

この9月に開催されたキリスト教史学会の大会で「女性宣教師による女子教育とはどのようなものであったか?」「現代を生かす新渡戸稲造のキリスト教人格論」というお話を聴く機会がありました。

19世紀女子教育の例である「マウント・ホリヨーク・セミナリーにおけるシステム」では、規律や家事、そして「自己申告(懺悔)」制度の中で、「良心」の鍛錬が重要視されたこと、また「キリスト教人格論」では、「ぶれない個の確立と多様なキャリアを生き抜く力を培い、平和のために尽力する人材を育てる」教育が、明治から現代までに繋がるキリスト教信仰の実践の継承である、そのような内容のお話でした。

私はこれらのお話しに共感を持ちつつも、同時にかなりの戸惑いを覚えました。そのような人材の育成には、「努力・発奮」の促しが根底にあり、その意識がキリスト教教育の継承だとしたら、それはエリート教育に他ならないのではないかと思うからです。

現在私は学校現場で支援が必要なお子さんやその家族に関する仕事をしていますが、「頑張ろう」は子供たちに頻繁に言わないようにしている言葉の一つです。

既に皆様ご存じだと思いますが、今学校では努力をしても学習能力が低く、静かに集中できない子、こだわりが強くパニックになりやすい特徴を持つお子さんの存在が「発達障害児」として認知され、そのような子供たちのケアと教育が、学校教育の大きな支柱になりつつあります。

この子たちは努力しても改善されない場合が多く、それ故に自己否定に陥り不登校になったり、時には暴力的になったりします。また彼らが育つ家庭環境も問

題になることがしばしばです。親が経済的に困窮し、鬱を病んでいるケースは珍しくありません。学校では先生に叱られ、家に帰宅すればお母さんの不安定さに付き合わされる・・・そんなケースを多く扱っていると、現代は大人も子供も疲れ果てているのではないかと思います。

そしてそうになっているのはもはや特別な人だけではありません。高度情報化が進む現代は、これまで普通の範疇で生きられた人の何割かを「使い物にならない人」にしてしまう社会へと移行しているように感じます。

以前であれば例え「のんびりした子」でも、それなりにその子に合った仕事を得られる可能性は高かったのですが、もはやそのような仕事は「特別支援」枠の職種になり、普通の人々はより高いレベルと効率を要求されるようになってきました。仕事内容も単純作業ではなく、気配りと手際の良さ、知識の深さを問われる、そのような高い能力を要求されるようになっていきます。

このような高度情報化社会への移行時期に、個々の頑張りを奨励するキリスト教理念を持ちだしたら、人々はさらに疲弊し、更に鬱に陥る人を増やすことになるのは間違いないでしょう。そう考えると冒頭で紹介した明治から現代まで続くキリスト教思想の根底を流れる個人の力量に強く依存する教えは、これまで多くの女性達を解放してきたけれど、現代では一つ間違えればそれは勝者の奢りの倫理になりかねない、その危険性を深く見据えた研究模索が今必要ではないか・・・そんなふうに思われてなりません。

普通の人々が「使い物にならない弱者」として括られる可能性のある社会・・・そんな厳しい社会への移行は、弱者を指導するリーダーの育成ではなく、自分の弱さを認めながら人と繋がって行く可能性を模索する・・・そこに救いを見いだせるかどうかがこのからのキリ

スト教の課題の一つかもしれないと思うのです。

私は近現代の女性キリスト者の活動軌跡を拾い上げる小さな作業を草の根的に続けていますが、現代にまで繋がる彼女達の功績の大きさと同時に、エリートとして生きた彼らの限界についても分析することの必要性をいつも感じています。

ささやかな私の研究は亀の歩みで協力研究員というポストを頂きながら、未だ成果もあげていないのですが、このような自分の違和感や懐疑を大切にしながら深めて行きたいと願っています。

まき・りつ（協力研究員）

雑録

徐正敏

みなさまに、クリスマスの平和と新年の祝福をお祈りいたします。

2015年も残り1か月となりました。今年もキリスト教研究所のプログラムを通じて、研究の成果と社会に対する責任を果たせたのではないかと思います。

特に今年度は、韓国の研究者たちを招聘し、講演会と研究発表会を多数開催しました。6月には、“TK生”で有名な池明観先生をお招きして、韓国現代史、民主化運動および日韓関係に対する貴重な証言を聞くことが出来ました。続いて7月には、金興洙教授(韓国牧園大学)をお招きして、北朝鮮の宗教状況について理解を深めることができました。二人の先生の講演録は、今年度キリスト教研究所の『紀要』に掲載する予定であります。12月半ばには、申光榮教授(韓国中央大学)をお招きして、韓国社会の政治、経済的危機と宗教の役割についてをテーマに研究会を行う予定であります。

日韓関係は現在、高い波のクライマックスにあると思います。キリスト教研究所のこのような学術的な努力が日韓関係の未来において、すこしでもプラスになるように祈っています。

今年度の『紀要』を現在編集中ですが、興味深い論文が多数投稿されました。また『あんげろす』にもすばらしいエッセイを書いてくださった執筆者の先生方に心から感謝を申し上げます。来年もキリスト教研究所の研究活動に深い関心と協力をお願いいたします。

そ・じょんみん（教養教育センター教授、主任）



研究所活動 (2015年7~12月)

東アジア戦後キリスト教史研究プロジェクト公開講演会

「戦後北朝鮮のプロテスタント・キリスト教」

開催日時：2015年7月11日(土)15:00-17:00

開催場所：明治学院大学白金校舎本館 1451 教室

講師：金興洙(韓国牧園大学教授・同大学博物館館長)

キリスト教研究所 1日研究会

開催日時：2015年7月25日(土)15:00-

開催場所：明治学院大学白金校舎本館 92 会議室

発表①

「広東軍政府と反キリスト教運動

——1924年国共合作下の教育権回収運動について」

発表者：朱海燕(客員研究員)

コメント：渡辺祐子(教養教育センター教授、所長)

発表②

「戦時下の河井道一天皇制国家、信仰、平和」

発表者：豊川慎(客員研究員)

コメント：播本秀史(文学部教授、所員)

懇親会

開催日時：2015年7月25日(土)18:00-

開催場所：目黒焼肉市場めぐろや本店

宣教師研究プロジェクト公開研究会

「欧米における日本キリスト教史研究」

開催日時：2015年11月4日(水)16:30-

開催場所：明治学院大学白金校舎キリスト教研究所

講師：A. ハミッシュ・アイオン (Professor, Royal Military College of Canada)

キリスト教研究所後援公開講演会

第36回 賀川豊彦記念講演会

「協同組合こそ人類の歴史の正当な継承者～お金の暴走を抑え、人を大切に作る社会に～」

開催日時：2015年11月14日(土)14:00-16:00

開催場所：明治学院大学白金校舎 2号館 2401 教室

講師：吉原毅(城南信用金庫相談役)

宣教師研究プロジェクト公開研究会

「現代中国におけるキリスト教」

開催日時：2015年11月20日(金)13:30-

開催場所：明治学院大学白金校舎 1359 教室

講師：段琦(中国社会科学院世界宗教研究所所員)

通訳：徐亦猛(福岡女学院大学准教授)

キリスト教研究所後援朗読劇

「『誇る者は主を誇れ』へボンと是清」

開催日時：2015年11月28日(土)14:00-

開催場所：明治学院大学白金校舎小チャペル

東アジア戦後キリスト教史研究プロジェクト公開研究会

「複合的危機の時代における国家、市民社会と宗教」

開催日時：2015年12月18日(金)15:30-17:30

開催場所：明治学院大学白金校舎 91 会議室

講師：申光榮(韓国中央大学教授、立命館大学客員教授)

新着図書

・『説教黙想 アレティア』No. 89、日本基督教団出版局、2015。

・『説教黙想 アレティア』No. 90、日本基督教団出版局、2015。

・『福音と世界』No. 8、新教出版、2015。

・『福音と世界』No. 9、新教出版、2015。

・『福音と世界』No. 10、新教出版、2015。

・『福音と世界』No. 11、新教出版、2015。

・『福音と世界』No. 12、新教出版、2015。

寄贈

・『じゅすた遺文』森禮子著、日本基督教団弓町本郷教会、2015。

・『松本亨と「英語で考える」ラジオ英語会話と戦後民主主義』武市一成著、彩流社、2015。

『改革派教義学 別巻 弁証学』市川康則著、一麦出版社、2015年。

・『親日と抗日を越えて～日韓キリスト教史から学ぶ新たなパートナーシップ～』徐正敏著、日本聖公会関東三教区生野委員会、2015。

・『敬愛大学総合地域研究紀要』第3号、敬愛大学総合地域研究所、2013。

・『基督神学』No.11、東京基督神学校、1999。

・『キリスト教史学』第69集、キリスト教史学会、2015。

・『執事 松岡和夫・わたしの説教ノート』、立教大学キリスト教教育研究所、2015。

---

あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第68号

---

2015年12月10日 発行  
明治学院大学キリスト教研究所  
〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37  
TEL:03-5421-5210/FAX:03-5421-5214  
Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

---

題字：澁谷 浩